校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

互恵的な学びの価値

令和３年５月６日は、今年度最初の「いじめを見逃さない日」でした。５時間目の学活の冒頭で校長講話として「いじめの本質」とともに「互恵的な学びの価値」について下記のような話をしました。

先に分かった生徒がまだ分からない生徒に一方的に教えるという行為、それがどれだけ善意に満ちた、誠実なものであったとしても、そこで生まれるのは友だちにやさしくしたという満足感のようなものです。何かに気づく、学ぶということにはおそらくなっていかないだろうと思います。もちろん、教えるという対応が全面的によくないと言っているわけではありません。できれば互恵的に学び合えるようにしたいということです。さまざまな違いや能力を超えて、どの人も他者とかかわることで豊かになれる（一人一人の居場所と幸せを大切にする）、そういう関係は互恵的でなければ実現しないからです。

私たちは、生徒一人一人が、これからさき生きて行くことになる世界において、他者と豊かにかかわりながら、学び、育っていってほしいと願っています。そこに「互恵性」がなくてはならないと思います。だから、教えることを全面的に否定するものではないけれど、学び合いを大切にする生徒になってほしいのです。

互恵的なかかわりが生まれるには、いくつかの大切にすべきことがあります。

①　分からなさを尊重する

当然のことですが、「分からないということは恥ずべきことではない」という考え方を皆で理解し合わなければ何事も始まりません。それには、私たち教師が本気でそう思い、本気で生徒の「分からなさ」を大事にしなければなりません。

②　尋ねることから始まる

ペアやグループの対話の始まりは、常に「尋ねる」ことにするようこだわることです。まだ分からない生徒が「わたし、わからない！」「ねえ、ここ、どうやるの？」と尋ねる、もうできている生徒がまだ分からない生徒に「どこで困っているの？」「どう考えてどこで分からなくなったの？」と尋ねる、そのどちらでもよいのですが、どちらにしても「尋ねる」ということから対話を始めます。

③　ともに考える

一方向に教えるのではなく、分からないでいる生徒に寄り添って、その道筋で「ともに考える」のです。そうしない限り、分かっていると思っていた生徒にも学びが生まれる「互恵性」は生まれっこありません。他者とともに歩むことで、それまでの自分にはなかった世界が見えてくるのです。また、無意識にしていたことの意味を知ることになるのです。

④　相手に合わせる心を持つ

他者とかかわる時になくてはならない心の持ち方に「相手に合わせる」ということがあります。もちろんいつもかもそうしなさいというわけではありません。他者とのかかわりにおいて、そういう状況もつくれる心の持ち方をしていることが大切だということです。それは、「小集団学習」において大切にしていきたい「聴き合う」ということと相通じることです。他者の言葉に耳を澄まし、他者の行動を尊重して見つめ心を砕く、そしてわからなさを共有するのです。

このように考えると、学び合いに「互恵性」を生み出そうとすることが、４つの校風（協・優・敬・恕）を育てることにつながっていることに気づきます。